

児童虐待事件から見るジェンダー

—2010年以後の日中韓映画を対象として—

総合科学研究科総合文化学専攻 g0219007 リュウトウ

要旨

本論文では、2010以降上映した、児童虐待を内容とした日中韓映画を対象として分析し、映画に隠されたジェンダー現象を取り上げ、映画から反応されている社会現象とジェンダー的な成因を考察していた。

本論文は、研究対象となった映画作品にある「救済者」というキャラクター設定を提出し、「救済者—被害者—加害者」の権力関係を分析していた。これらの作品には、私的領域が重視されるために、児童虐待問題が取り上げられにくくなっているという共通の現象が日中韓社会で見られている。それに加え、公的領域に立ち、公私を超える主導能力を持つ父親は、人間関係の構築においてより優位に立つことができることが明らかにしていた。それに対して、日本社会では、長年にわたる性別役割分業観念により、女性がより多くの「母性」の要求を受け、その結果、母娘関係が世代間連鎖することが主な原因となっている。韓国社会では、男性がコミュニティで圧倒的な発言力（discourse power）を持つため、男性の声と女性の声が対立し、父親である男性の役割へのプレッシャーが大きくなっている。最後、中国社会では、祖父—父親—息子という「伝統である父子関係」は家族の中核となり、世帯間に重視されていると考えられる。そのように、日中韓社会での各自にある原因は考察されていた。